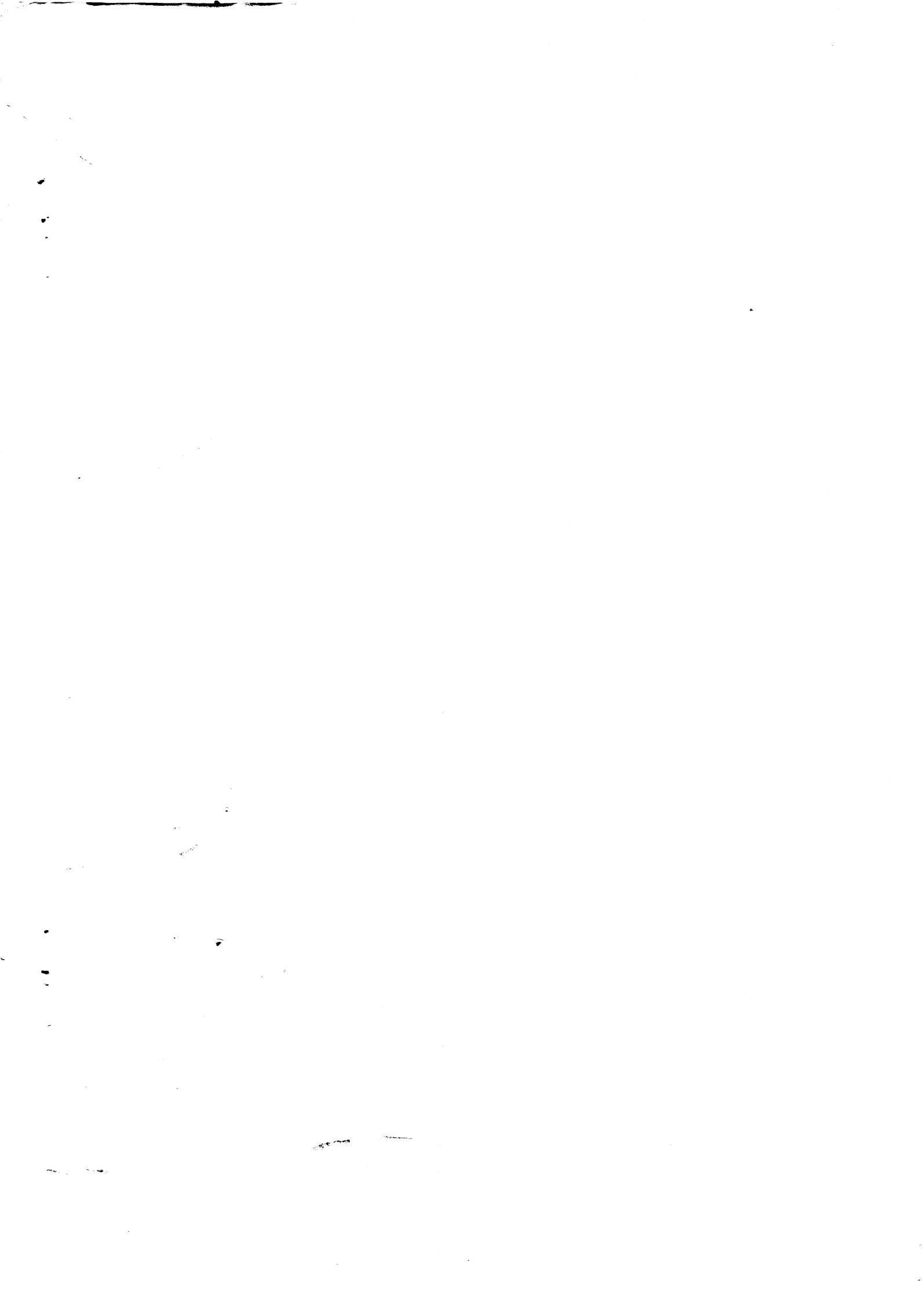


94年たんぼ報告書

野川で遊ぶまちづくりの会・たんぼ班

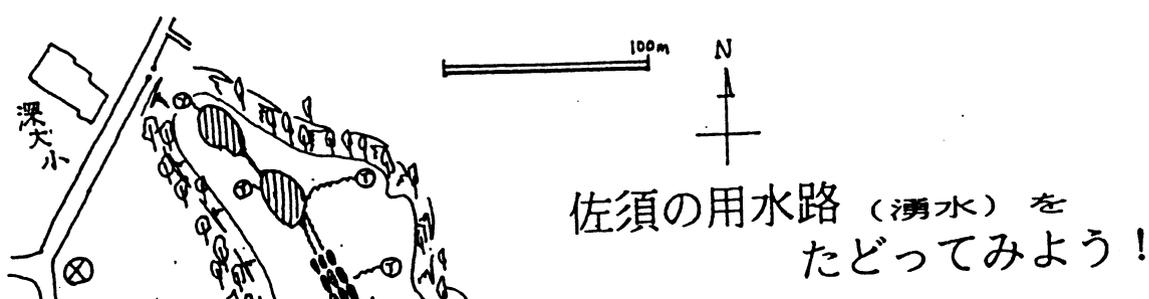


目 次

班 員 名 簿	1
地 図	2
9 4 年 作 業 行 程 報 告	3
会 計 報 告	6
9 4 年 田 ん ぼ 班 の 反 省	7
深 沢 芽 生 ち ゃ ん の 絵 日 記 よ り	9
自 己 紹 介	
清 水 美 津 江	1 2
石 丸 聖 子	1 3
田 村 千 恵 美	1 4
平 尾 雅 和	1 5
渡 辺 真	1 6
あ と が き	1 7

9 4 年 た ん ぼ 班 メ ン バ ー

石丸 聖子	調布市深大寺東町
大木 健次	調布市深大寺南町
尾辻 義和	調布市仙川町
黍島 陽子 (かもしか子供会)	武蔵野市
清水 美津江	調布市深大寺東町
田村 千恵美	調布市深大寺東町
永瀬 令子	川口市
平尾 雅和	調布市西つつじヶ丘
深沢 裕太・芽生	調布市深大寺南町
依田 輝男	調布市深大寺南町
四方田 清	調布市深大寺東町
渡辺 真 (8月まで参加)	調布市若葉町



都立農業高校・神代農場

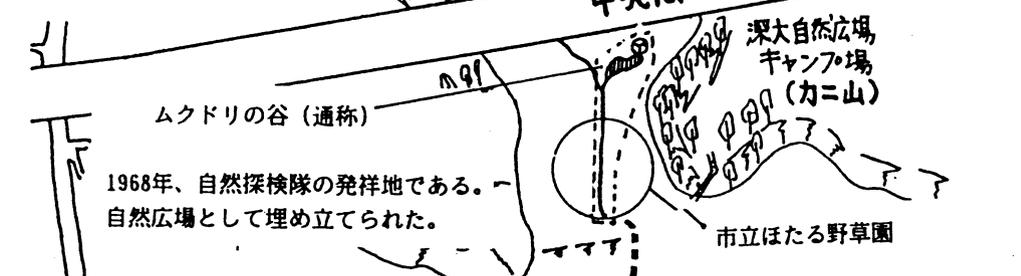
湧水によって大きくえぐれ、谷をつくっている。市の水源として地下水を汲み上げているところが近いが、豊かな森が湧水を守っている。

いずれ、公園として整備されてしまうそうである。

わずか10メートルの清流広場
あとは、地下へ...

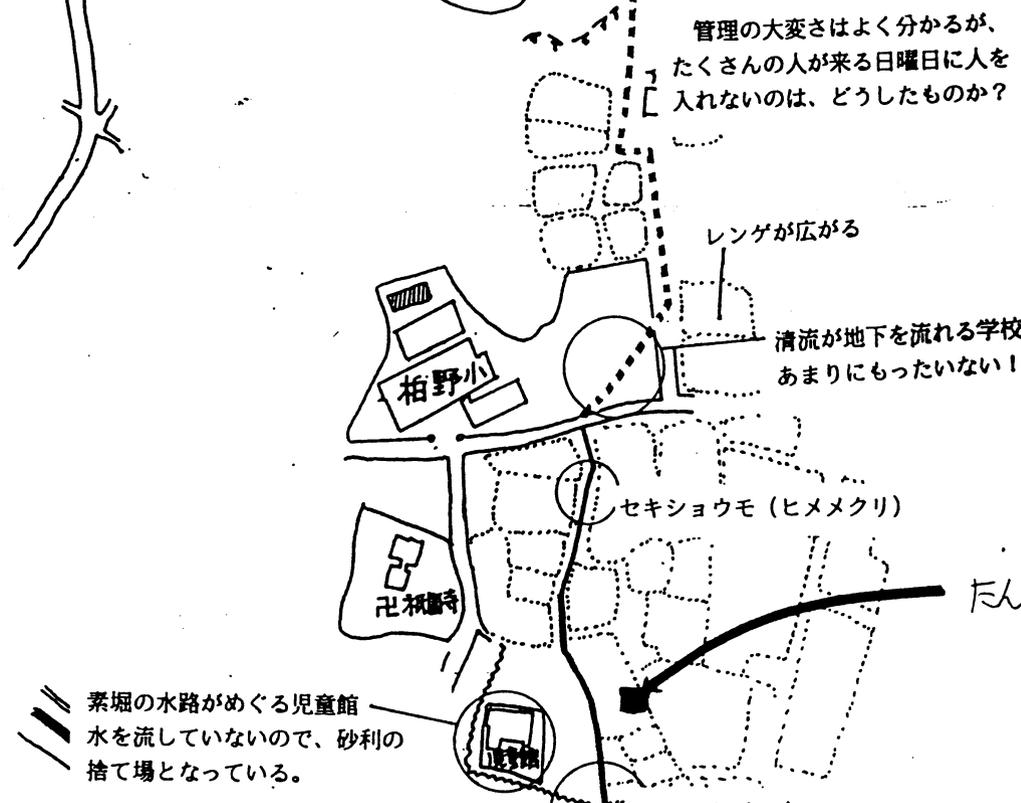
せつかくの素堀の水路も水のないことが多い。盛土してある。

中央高速自動車道



1968年、自然探検隊の発祥地である。自然広場として埋め立てられた。

管理の大変さはよく分かるが、
たくさんの人がある日曜日に人を入れないのは、どうしたものか?

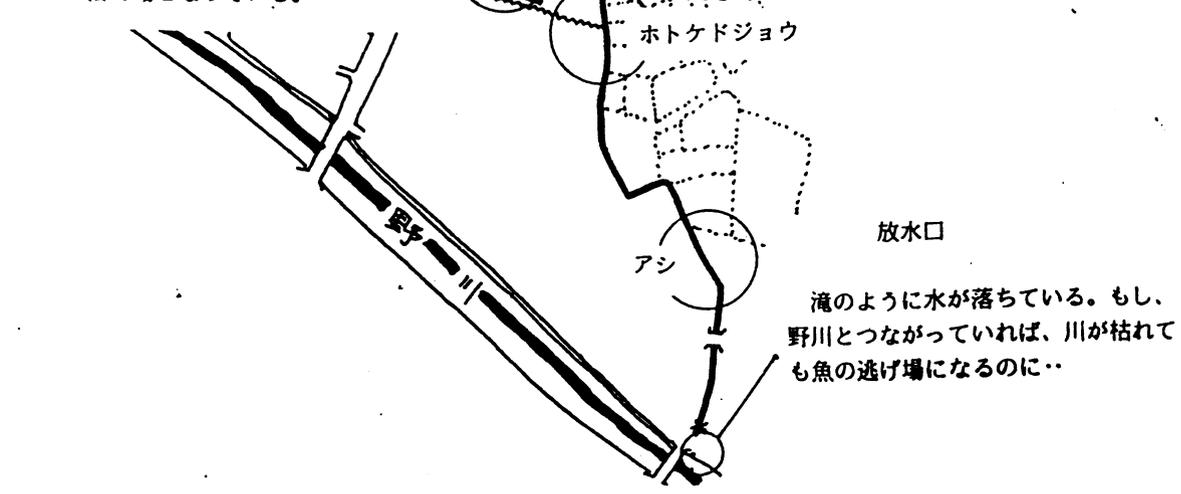


レンゲが広がる

清流が地下を流れる学校
あまりにもったいない!

素堀の水路がめぐる児童館
水を流していないので、砂利の捨て場となっている。

たんぼ



滝のように水が落ちている。もし、野川とつながっていれば、川が枯れても魚の逃げ場になるのに...

94年作業行程報告

- 4/23 冬草取り 4人で、田圃全体の半分ほど、冬草をとる。
- 4/24 冬草取り 田んぼ班参加者は、10人(家族)となる、(後に
第1回ミーティング 永瀬さん、かもしか子供会も参加して計11人)。.
冬草取り完了。引き抜いた草は、自然広場脇のヤブへ
すてる。
- (ミーティング確認事項)
- ・連絡網作成
 - ・会員名簿作成
 - ・事前の段取りをしっかりとる
 - ・会員以外の人々の作業参加も可とする
 - ・94年予算承認
- 4/29 苗床作り 本田の一部をクワで起こし、粹土し、苗床(畑苗代)とする。
- 5/8 種蒔き 3晩水につけたアキタコマチ(ウルチ)の糊を蒔き、覆土。
本田へ施肥 同時に、苗代の回りに水を引く。
畔削り また、本田に、5ヶ付間積んだ堆肥をまいて、耕うん。
さらに、畔の内側を少々削る。
- 5/22 大家の植木畑除草 大家との交流もかね、除草を手伝う。
- 5/29 苗床のネットを外す 苗丈5~5センチ、色やや薄い。
- 6/4 畔の整形、除草 くろつけしやすいように、カマで畔を削る。
苗床追肥 苗床に化成肥料8号を追肥。
- 6/5 くろつけ (手順)
- ①畔に沿って内側に溝を掘り、水を入れる。
 - ②畔に水をかけ、湿らせる。
 - ③取水口からみて、一番奥のコーナーから泥を作り始める。
コーナーごとに泥で水止めを作り、出来上がった泥が
必要以上にゆるまないようにする。
 - ④硬さを調整した泥をてで畔に塗り付ける。作った泥は全

部使いきる。

⑤空いた溝に再度水を入れる。

⑥塗った畔の上を、水をつけたクワでなでつける。

- 6/12 しろかき
水路清掃
本田をクワでしろかき。ただし水と泥を混ぜ合わせる程度。
また、用水の確保のため、承諾を得て、ウナギ屋さんからの素掘りの水路を整備。(用水路本流の水が万一ないときはこの水に頼るため) ※ウナギの養いくもしている村越さん
- 6/18 しろかき
苗取り
耕耘機でしろかき(化成8号2袋投入)。田ならし。
苗取り。苗束ね。
- 6/19 田植え
雨の中、大人数の参加で決行。
もち米の苗は、去年同様、関森さんからもらう。
1株3~5本で、浅植え、株間15センチ・うね間30センチをめざした。列が相当乱れる。後日補植をする。
- 7/3 根きり
中間ミーティング
活着し終り、分蘖^{けつ}の始まっている株を^きで根きりして、
ゆく。水温高い。
(ミーティング)
・田植えの段取りが悪く、不揃いだった。
・米作りの技術習得は意義あり 等々の意見
- 7/17 根きり
成育旺盛。なれど浮き草に覆われ、水温は思いの外低かった。
- 7/24 日干し
浮き草対策と、根への酸素・温度供給のため、取水をとめる。
堰をあげて丸1日。オタマジャクシ全滅。浮き草は元気。
トンボ、アマガエル、くも、バッタがみられる。
- 8/8 駆除
2人参加。手でがの幼虫を計500匹ほど駆除。
- 8/11 消毒
殺虫剤散布。
- 8/15 田の草取り
親睦会
(親睦会)
93年に比して、雑草は増えている。すでに田は乾いている。
・入会のきっかけは、子供の教育のため。

- ・反省としては、田植えをキッチリとやりたかった。
- ・また、農業委員会から大家にTELが入り、大家が当会との関係でナーバスになっているとの報告がされる。

9 / 4 防鳥糸張り すでに穂は垂れている。

9 / 11 かかしづくり 4体完成、田に立てる。

10 / 8 稲刈り 実りはよい。倒伏やや多い。茎の太さは去年並み、(もっと
9 はざかけ がっしり太くまた、穂先のある^節が比較的長ければよかった)。がまがえる捕獲。かまきりなど生物多数発見。

10 / 30 脱穀 大家所有の旧式機械で。丸一日かかる。

11 / 3 もみすり 機械のベルトの損傷などで思いの他時間がかかる。

11 / 7 精米 佐須の共同精米所にて。

収量 うるち118kg もち22kg

11 / 23 収穫祭 田んぼにて餅をつき、収穫を祝う。
白は、竹内喜好治さんより借りる。

12 / 3 堆肥つみ カニ山の落ち葉と糠と鶏糞で、本田の端っこにたい肥を積む。

95年

1 / 29 親睦会 反省会をメインにしたかったが、メンバーの都合により集まりよくなく、もっぱら飲み食い。
それでも次のような意見が出る。

- ・後継者(中高生くらい)育成ができればよい。そうすれば、子供たちが^といじりをもっと好きになるし、会が次世代に継承される。

(文責 大木)

9 4 年 会 計 報 告

1. 収入

会費	69,000
米購入代	59,000
計	128,000

2. 支出

器具備品		21,670
消耗品	{ クワ と石 すべりどめスプレー	{ 18,540 2,100 1,030 }
	{ 糶、テグス 農薬 電気・水道 ガソリン・オイル	{ 1,619 500 3,000 2,781 }
肥料		9,156
文具、コピー		1,977
通信		1,200
耕耘機修理		9,270
飲食		10,742
謝礼		8,359
米購入	{ 中元・歳暮 修理謝礼	{ 4,260 4,099 }
		70,000
計		140,274

3. 合計

▲12,274

4. 説明

- (1) ガソリン、オイルは耕耘機用として購入したものだが、今後も常備し、耕耘機使用にあたっては、それら自前の燃料にて行うこととしたい。
- (2) 95年3月5日、荒おこしの際、耕耘機のキャブレターがつまり、近所の人に修理してもらい、その謝礼としてビール1箱を購入し届けた。また結局、耕耘機を修理屋さんに出すことになり、修理代を支出した。同様なトラブルを避けるためにも、今後、耕耘機を使用するときは、最後に燃料コックを止めて自然にエンジンが止まるまで待つ（エンジン内に燃料がないようにしておく）こととしたい。
- (3) 肥料代の内訳は、ぬか3,090円、鶏糞2,950円、化成肥料3,116円です。
- (4) 飲食費の内容は、作業終了後の飲み物と95年1月29日の懇親会の費用だが、95年は予算消化状況をみて対処したい。（原則自費。また通年5,000円以内に押さえる等を考えたい）
- (5) 米購入費について、収入と支出が合わないが、差額はもち米購入分である。もち米については、全量収穫祭の餅つきに使用した。（収穫祭の予算は、別立てで行ったが、もち米代見合い分を田ば予算の収入としてもよかった。）
- (6) 電気水道代の3,000円は、93年も大家さんに請求されたもので、脱穀機等の電気代と収穫祭等の水道代として94年も同額を支出した。
- (7) 94年期の赤字は、95年へ繰り越しとしたい。
- (8) 95年の予算を作成する際は、予備費を10,000円以上計上するなど万全を期したい。

95年たんぼ耕作の反省

1. 技術面の反省

概要 百坪の土地には十分な人手があり、93年度に比して著しく作業力がアップした。加えて93年度の経験をへて段取りが格段に良くなり、全体として質量ともに作業能力は向上した。

換言すれば、93年度のたんぼ班は、「とりあえずたんぼに集合して、大家さんを呼び、段取りを教えてもらって、必要な道具を出し、道具及び部品に不足があれば購入に走り、それからやっと実際にたんぼに入り、実地に大家さんの手ほどきを受けながら作業を行う。」状態だった。

それが94年度では、「大体の段取りは集合時点ではついており、来た人は順繰りにたんぼにはいって、大家さんの指導が特になくとも作業を行うことができ」るまでに進歩した。

問題点 くろぬり、しろかき、稲刈り等については、作業上格段の進歩があったが、一方でまた別な技術的問題点も発生した。

(1) 苗作り

なんといっても苗七分。つまり丈夫な苗ができれば稲作の七割方は成功も同然と言われる大事なポイント。

ところができた苗は黄色く、丈も短かった。

結果として、みのりに影響はなかったが、堆肥による土作りと好天のせい大きい。

やはり苗は苗としてちゃんと作るべきであった。

苗不作の原因は

ア 苗床 水位に比して高すぎ、また土くれが大きく、養分に乏しかった（この時点では堆肥未投入）。

イ 品種と作り方の関係 アキタコマチという多肥を条件とする銘柄品種にもかかわらず、アにもあるように養分・水分に乏しい育て方をした。

この2点だろう。

そろそろ日射も強い6月のたんぼの脇で、近所の農家の苗（7 8センチ）とうちの苗（4 5センチ）を比べ、「この日差しのなかでもペシャンコとしない強い苗だ。」とピンピンしているうちの苗をほめてはみたが、追肥にもかかわらず、最後まで背丈が伸びなかった。

大家さんも「栄養不足だ。」と言っていた。

短い苗は、確かに強さはあるが、植えづらいし、もし天候が悪ければ夏

の間に穂が出る高さまで伸び切らない可能性があった。

(2) 浮草

やはり2年目になって出て来た雑草。

消毒1回、除草剤なしでやっているの、いずれはと思っていた。浮草は、田植えの後見る見る広がった。これは水温を下げる稲の大敵である。除草は人手に負えるものではない。

活着後、2、3度田の水を干した。根への酸素の補給と地温を高める意味もある。これはたちまち、たんぼを熱水の水たまりに変え、オタマジャクシをほぼ全滅させた。その割に浮草はほとんど枯れなかった。浮草とて水に浮いていない状態で直射日光を浴びると黄色く枯れるのであるが、あいにく畝間は直射日光を遮るスペースがたっぷりなのだった。

95年度は初期に浮草対策を行いたい。

(3) 用水路のせき

幸い94年は、水にはこまらなかつた。

田うえ後、7月一杯くらいは水が十分に必要だ。特に夕方から翌朝にかけては保温の意味もあり、水が浮いている状態が望ましい。近所のメンバーが通勤の行き帰り見回った。下校時の子供が堰を外したり、下流の農家の人が堰をいじることもあったようだ。「昔ならとんでもないこと。」(大家談)なのだろうが、プロではない我々にはそのことを言う権利もないし必要もない。いかがであろうか。

(4) 脱穀、籾すり

籾すり機のベルトが切れている。どうにかつないだが、何せ旧式である、全体の機能も十全ではない。あくまでもこれでやるか、別途、機械を頼むか、95年は考える必要あり。

(5) その他

ア、しろかき

94年は、田植えの当日に行った。また、取水口付近に泥はない状態だった。(柔らかい泥は流れて植えづらい状態だった。)
95年は、少なくとも前日にしろかきを行い、泥をならすとともに、水の量を調節して、水が泥の上にわずかに浮いている

状態を目指す。

イ、田植え

株間、畝間のとりかた。線の張り方。水の量。それぞれ工夫する必要有り。

ウ、はざかけ

94年は倒れた。隣の村越さんのやり方を見習い、作り直したら大丈夫だった。ポイントは、必ず三脚にすること、横さおは1本で十分、横さお1本につき3組の三脚を立てること、竹材は古くても可。

(以上、文彦太木)

^{いづき} 深沢芽生ちゃん(小1)の絵日記より



うみまいたてなま⁶が^雨
 えたらきたらえしん¹⁹が^雨
 のもすわ手した⁵つに^田
 つかしましあなん^ずの^田
 しいなめつと^は水^をで^な
 あま^くう^えて^いき^いち^雨
 おも^をり^てえ^てし^ちが^雨

つし中たたわきはニぎ
 たてののたかが回にお
 なくかおでしいす目お
 あれらじははいにも
 とままきどとこやい
 おしつんうきままつま
 もたたがしかつれてした
 い、よいててみた。
 てわねきうをし、た
 たをかととまから、
 おしといおめいら
 じはつをもてままい
 さ、てあししつね
 んよなけままたてのた
 にかおてしつ。

中でいもとつ
 う、しちとたごあり
 がおゆごれとくり
 たもうめたおはが
 のち、はおも、と
 しつわ、こいすう、
 みきた三めまこ、
 たをしびはししと
 なしたよ、たむい
 あますう、ついか
 す、のでひ、かまし
 もした、よ、しした
 らちた、う、いた、
 いご、と、し、
 しめら、ごだ

う わつば ただ
 にこらぶをおい、
 なのだだもじね、
 っきけけつさの、
 てかががてんたを、
 いいの下だとはした、
 るのこの、いをまんく
 の中りほこ、おしぼ
 かはまうくしろた、
 な、しかきよし、行
 あどたらに、まほ、
 う、で入いしして
 とい、てれねた、てい
 ふう、きたの、あ、
 しふ、てら、た、の



- たんぽ班の子供たち (94年度)
- 深沢 裕太 (小4)
 - 葦生 (小1)
 - 尾辻 家 (中学)
 - 男子4名 (小6)
 - 年長
 - 永瀬家 男子2名 (小2) (小1)
 - 四方田 ゆうじ (小4)
 - 耕児 (小1)
 - 大木 涼 (小2)
 - 悠 (年長)
 - 田村家 長男 (小2)
 - 葦生 (年中)
 - 石丸家 長男 (年長)
 - 平三 梓 (小1)
 - たいが (小3)

私と田んぼ

清水 美津江

私と田んぼの出会い、「野川で遊ぶまちづくりの会」との出会いでした。我が家の小学五年生の娘が、社会科の授業で日本の産業という事で米作りを勉強することになりました。そのときちょうど野川の会の人達が米作りに初挑戦するというのを聞き、体験学習するのに良い機会と思い参加させてもらったのがきっかけでした。

昨年春から手探り状態で農家の方の指導を仰ぎ米作りをスタートしたものの、野川はあちこちで干上がり、神代農業高校の池の湧き水からなる佐須の用水路の水量も減り自然の厳しさを思い知らされたのでした。

そんな中でどうにか水を溜め、しろかきそして田植えまでこぎつけたのでした。

春から初夏にかけて、全国的な水不足と低温そして日照不足と新聞やテレビなどで見聞きするたびに私たち米作り一年生としては不安がよぎったのも不思議ではないのです。

春から苗が順調に育ってはいましたが、果たして穂が出てくれるのだろうかと心配が募る中で、いつものように田まわりに出掛けました。東京のお盆を過ぎた頃でしょうか、葉と茎の間から何本かの穂がのぞいている稲を見つけた時は、思わず顔がほころんでしまいました。

あれよあれよと言う間に米の深刻さが伝えられ、戦後最悪とまでいわれているのに、私たちのたんぼの稲は近所の農家の人にできが良いとほめられ、収穫量もほぼ農家に負けないくらいの成果がでたときのうれしさはひとしおでした。

幼い頃家の米作りは見てきたものの、田んぼにメダカやドジョウをとりに行く程度のことでしたので、年間を通しての作業は初めてでした。それは想像以上に大変であり、やりがいのあることでした。

子供の付き添いで始めた体験が、日本の米の将来や調布の湧水の重要さ、環境問題への関心にまでおよび、さまざまな広がりと考えさせられました。

工業で発展を遂げた日本ではありますが、農業は食の原点であり日本人にとって米は主食であるのだから、一生に一度はだれもが米作り体験してみる価値があると思います。

毎日食べるお米も、農家の方が私たちと同じ思いで作ってくれたのだと思うと、いとおしさ美味しさは数段変わった気さえする今日この頃です。

今年も、初まきも済ませあと数日で田植えも始まります。水神様に日本じゅうの豊作を願ひ、一本一本心をこめて田植えをして皆さんといい汗を流したいと思っています。

これからも新たにどんな出会いや発見があるのかとても楽しみです。

(順巻に全員の「自己紹介文」(タイトルは私と田んぼ)を掲載いたし、思います。皆さんよろしくお願ひします。)

“私と田んぼ”というタイトルで作文を――と言われても、この四月に田んぼ班に入れていただいたばかりで、タイトルにピッタリするような何ものもありません。自己紹介文でよいとのことですので、田んぼについてかすかに残る幼い頃の思い出から書き出すことにします。ちなみに夫の正人も同じ地の出身ですから、私たち二人の脳裏のどこかにこびりついた共通体験であると思います。

生まれ育ったのは神奈川県箱根町宮城野という所です。箱根という観光地にありながら特に何の取り柄もない場所で、山と山の間、国道138号線と早川に沿ってどうにか開けたという感じの集落です。火山の土壌に加え平らな場所も少ないので、農業はそれほど盛んではありませんでしたが、それでも川沿いには不規則な形をした水田が広がり、稲が植わっていないときには、子供達の絶好の遊び場でした。

春にはやはりれんげ草です。川の土手のふきのとうが伸びきってしまう頃、いっせいに濃いピンクで田んぼが染まります。蜜蜂が忙しそうに花から花へと飛び交う中、ほんのり甘い匂いに包まれて日が傾くまで遊び、母親の機嫌を取るために川でセリ（和芹）を摘んで帰ったものです。田植えが済めば、おたまじゃくし、蛙の鳴き声、夕風にむせるような青田の匂い、そして山間の短い夏の終わりにはトンボ、いっぱい赤トンボでした。

秋はよく稲むらでかくれんぼをしましたが、あの乾いた稲の暖かさと匂いが今でも恋しくなります。寒くなると、刈り取った後の切り株と競うように霜柱が立ち、雪が積もり、白く覆われた田んぼは、これまた絶好の遊び場でした。

今、私のふるさとにあの田んぼはありません。生コンの工場に、住宅に、資材置き場にと姿を変えました。農機具が並び米ぬかの匂いがしていた農協も、鉄筋三階建の金融機関になりました。毎年8月のお盆に行われる虫送りのたいまつだけが、かつてはどこかに田んぼがあったことを偲ばせます。きっと日本中でこんな変化が起きたに違いありませんし、今も田んぼと田んぼを取り巻く状況は刻一刻と変わっているのでしょう。善し悪しを簡単に言えることではないにしろ、やはり寂しい気持ちになります。

そんな折り、四方田さんを通じて『野川で遊ぶまちづくりの会』と出会い、田んぼ班に参加させていただくことができました。田んぼにたくさん遊ばせてもらった私、今度はもっと深い付き合いができそうで、なんだかわくわくしています。今日7月3日、田植えから2週間たった田んぼで中耕という作業をしてきました。この夏一番の暑さで水は温み、若い稲もおたまじゃくしもうれしそうでした。あのちょっと生臭い泥の匂い、優しく懐かしい私の田んぼの匂いでした。そしてこれから本当に“私と田んぼ”が始まりそうです。

上京するまでの18年間を、山と緑とたんぼに囲まれて育った。私の2階の部屋の窓から見た景色は、庭の片隅に樹齢80年の大きな柿の木が天を仰ぎ、そう大きくはない山々が連なり、山のふもとから川が蛇行しながら流れ、寄り添うように段々とたんぼが広がってくる。私にとってのたんぼは、四季折々の変化を目や耳・体全体で感じることでできる媒体のような存在であった。

春には蓮華草がたんぼを覆いつくし、蜜蜂が甘い蜜を集めてその蜂蜜を少々いただくのだが、顔がほころびるほど美味しく蜜蜂がとても羨ましかった。やがて蓮華草も土に還り肥やしとなる。たんぼに水を導くと蛙が一斉に産卵し、独特な卵の塊があちらこちらに出現する。シロツメクサは畦や畦の斜面を白と緑に塗り替え、根っこでがっしりと守ってくれる。蛍は川から次々と飛び出し光を放ち幻想的な飛行を始める。蛍が稲にとまり葉脈を照らし出す。それはもう田舎のネオンサイン。神秘的な気分になれる私の一番好きな光景だった。

夏の台風が接近し大雨になると、川が氾濫しすさまじい勢いでたんぼに雨水が流れ込み、父と母は稲のことを心配していたが、私はそれより川に棲むメダカやハヤ等の生き物たちが心配だった。いまだに不思議なのだが台風一過の後メダカ達の姿は一匹も見られなくなっているのだが、しばらくすると泳ぎ回っている群れを目にすることができた。いったいどんなふう激流から逃れ生きていたのだろうか。あの厳しい自然条件の中でも命の火は決して消えてはいなかったのだ。

倒れてしまった稲はもう空に向かって伸びて行くことはできないけれど、それでも米を実らせていく。それに比べ人間の力のなんとはかないことか。

蛍のいたあの川も一部コンクリートで整備されてしまった。(幸いにも今年も蛍が舞いました。)

小学性ときだったか山に囲まれたたんぼ(山田と呼んでいる)の地下を新幹線が通ることになり、開通後山田にいとゴオーと不気味な地響きがしたものだ。稲や山の木々はどんな気持ちでいたのだろうか。人間の勝手な行為を見る度に、植物や生物の言葉がわからないのがもどかしかった。

主人は新宿に生まれ育ち、もちろんたんぼに入る経路がなかった。たんぼに誘ってくださった四方田さんに大変感謝している。親子3人育った環境も思いもそれぞれ違うが、たんぼとふれあいながら、お米と一緒に成長してゆければと思っている。

田んぼと言えばその思い出は幼稚園時代に遡ります。当時私は横浜に住んでいました。まだまだ自然は多く残っていましたが、周辺には田んぼはなかったように記憶しています。しかしながら田んぼとのつきあいはありました。私の両親は秋田県出身であり、しかも母親のほうの実家は八郎潟の稲作農家なのです。夏休みにもなるとよく連れて行ってもらいました。その際、従兄弟たちとよく遊んだ場所が田んぼと水路だったのです。泥遊びをはじめ、鮎などの小魚やザリガニ獲りに興じたものでした。今でも従兄弟たちと集まると、私が足を滑らせ田んぼに落ちたことが笑いを誘っています。また、直接田んぼのことではありませんが、広い土間で祖父母が藁で縄を編んでいたこともかすかに記憶に残っています。

小学校4年生からは神奈川県海老名市に移りました。当時、海老名駅の周辺は一面の田んぼでした。春から秋にかけては学校がひけると毎日のように自転車で仲間と繰り出しました。蛙を獲り、そしてちょっと残酷ですがその蛙を地面に叩きのめし、皮を剥ぎ、それを餌にザリガニを釣り、またまたそれを餌に鮎やどじょう、なまずを釣っていました。ときには大きな段ボールで筏遊び等も楽しんだものです。

幼少の頃の田んぼとのつきあいは以上のように、田んぼは様々な生き物との出会いの場、遊び場を提供してくれた、子供にとっては得難い貴重な所でした(今にして思えばですが)。それがやや趣を異とすることとなったのが大学時代です。入学したての頃は一生懸命勉強して、医学部は無理でも薬学部か理学部に進もうと思っていましたが、楽しい友達付き合いを優先した結果、2年生後半の進路選定の時には進学できる道は農学部しかありませんでした。結局、3年生からは農業生物学科、いわゆる農学科で学ぶこととなりました。同学科では毎週1回、田無市にある大学の農場で実習がありました。稲作、野菜作り、花作り、乳牛の世話・乳搾り、トラクターの運転方法など農業に係わる様々なことがその対象でした。そのなかでも稲作実習は、春の荒おこしから秋の収穫、そしてその後次年度に向けた土壌管理まで長期にわたるため、友達付き合いを固める上で重要なものでした。数品種の苗、密植の度合い、肥料成分の相違による生育、根の張り具合、収穫量等を測定しレポートするわけです。こうした意味で「田んぼ」は実験「圃場」に変わり、稲は実験材料と変わった訳ですが、圃場で汗を流した後の夜遅く迄のどんちゃん騒ぎはまた格別でした。勿論実習の他に講義もあり、「稲の一生」という教科書のもとに少しは勉強したのですが、残念ながら今では断片的にかたすみに残っているとまとも言えないほどすっかり忘れてしまいました。ただ「たんぼ班」のみなさんと作業をしていると、やはり体のほうは覚えているのだと実感しています。

卒業後は、農業とはほとんど関係のない金融関係の仕事に就きました。しかし、幼少の頃そして大学時代に楽しみ親しんだ土いじりは忘れられず、区民農園、市民農園で野菜作りを楽しんでいる時に、この「野川で遊ぶまちづくりの会(たんぼ班)」のことを聞き及び、迷わず参加させていただくことにしたのでした。

残念ながら転勤のため、たんぼ班での楽しい、有意義な活動を続けることができなくなってしまいました。大雨の中、みなさんが苦勞して植えて下さった愛しき苗達も、もう今頃はすっかり穂をたれていることでしょう。田植えに参加できなかったこと、また収穫の喜びをもみなさんと分かち合えないことが心残りです。すばらしい天候が続き、極上の美味しいおコメがとれること、そして今後ともたんぼ班がより充実した活動をなされることをお祈りいたしております。班長の大木さんをはじめみなさん、短い間でしたが仲間に加えていただきありがとうございました。ロンドン方面へご旅行、ご出張の際には是非御一報下さい。お待ちいたしております。

連絡先:

株式会社大和総研ヨーロッパ
Daiwa Institute of Research Europe Ltd.
5, King William Street
London EC4N 7AX U.K.
Tel: 001-44-71-548-7156(直通)

あ　と　が　き

95年1月29日、都立農業高校神代農場レストハウスにて、田んぼ班の反省会兼・懇親会を行った。

メンバーが全員は集まらず、討議のかたちにはならなかったが、それでも散散五五、貴重なお話を聞くことができた。

その中の一つに、小金井市のくじら山原っばのお祭りの話題があった。曰くそこでは、中高生クラスの青少年も巻き込んで、ジュニアキャンプリーダー的存在を養成し、大人→中高生→小学生と世代継承をしつつ盛大な祭を毎年行っている。

子供は、せいぜい大学生までの年齢の若い人が相手だと、よろこんでついてまわって遊ぶ。

中高大生の若い田んぼリーダーたちが、子供たちに作業を教え、また一緒に遊ぶ。その子供たちが中高生になったら、次の小学生とともに田んぼを作る。そういうことになったら、当会は（この地域は、調布市は）すばらしいことだろう。

ハード（農地、農家、ハケ、林、湧き水）は揃っている。

3年目野95年は、ただお米を作るだけでなく、「だれを、どういうふうにまきこんで、どういう将来をめざして、今何をするか」、というソフト作りの構想を頭の片隅におきつつ、1年をすごしたいと思う。

今年から、田村さん（ダンナ）と2人責任者体制でいきたいと思います。皆さん、94年はありがとうございました。今年も宜しくお願いします。また、この報告書の発行及び平尾さん、渡辺さんの文章の発表が大変遅れました。申し訳ありませんでした。

1995年3月31日